

春風ぞ 吹く

宇江佐真理

新潮社



代書屋五郎太参る

風ぞ吹く



宇江佐真理

新潮社

著者紹介

1949年北海道函館市生まれ。函館大谷女子短期大学卒業。1995年、「幻の声」でオール讀物新人賞を受賞して作家デビュー。2000年、『深川恋物語』で吉川英治文学新人賞を受賞。その他の作品に『銀の雨 堪忍旦那為後勘八郎』『紫紺のつばめ 髪結び伊三次捕物余話』『雷桜』などがある。

はるかぜ ふ だいにしよや ごろうなまゐ
春風ぞ吹く 代書屋五郎太参る

2000年12月20日発行

2003年3月5日3刷

【著者】 宇江佐真理

【発行者】 佐藤隆信

【発行所】 株式会社新潮社

郵便番号162-8711 東京都新宿区矢来町71

【電話】 編集部03-3266-5411 読者係03-3266-5111

【印刷所】 大日本印刷株式会社

【製本所】 加藤製本株式会社

© Mari Ueza 2000, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。

送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-442201-0 C0093

価格はカバーに表示してあります。

目次

月に祈りを 5

赤い簪、捨てかねて 51

魚族の夜空 109

千ものの言葉より 167

春風ぞ吹く 223

装画 村上 豊
装帧 新潮社装帧室

春風ぞ吹く

代書屋五郎太参る

月に祈りを

一

幕府小普請組、村椿五郎太の鼻祖は甲斐国の出で、農民から身を起こし、武田信玄の足輕であつたという。武田家が滅びた後、一子小五郎は徳川家康の家臣に仕え、慶長の役、大坂の陣と戦い、その働きめざましいことから主の姓、村椿を賜る。家康が初代將軍として江戸に赴いた折にも伴をし、江戸においては勘定奉行所の役人を仰せつかった。ここまでが村椿家の華々しい足跡であつた。

しかし、小五郎から何代か後の先祖が料理茶屋に刀を忘れたことが公になり、ために小普請組に落とされた。武士の魂である刀を忘れるとは何んたる不屈きという理由である。五郎太の父親の清五郎は先祖の不始末を死ぬまで呪い続けていた。清五郎が五郎太に今際に残した言葉は「高

を括るな」であつた。たかが刀の一つ、忘れたところでお役ご免になるはずがないと高を括つて先祖は小普請組に落とされた。くれぐれも物事を安易に考えてはならぬと。

しかし、その父親も祖父も、いづれ御番入り（役職に就くこと）になるだろうと高を括つていた節が窺える。

月の半ばと末日に設けられていた逢対日あいたひにもあまり出かけず、積極的に就職活動をしていたとは思われなかつた。逢対日は小普請組支配が部下の希望を聞く貴重な日である。それなのに祖父も父親も友人と碁を打ったり、魚釣りに行ったりしてやり過ぐすことが多かつた。御番入りはなる時にはなる。じたばたしても仕方がない、と。

してみると、この高を括る呑気な性質は村椿家の男達に代々伝わる遺伝であつたのかも知れない。武田信玄に仕えた先祖にしろ、百姓をするより侍さむらいの真似事をした方がなんぼかまし、と高を括つたからではなからうか。

村椿五郎太はこの頃、そんなふうに考える。

小普請組は屋根瓦が壊れたり、垣根が崩れたなどという小さな破損を修理する部署である。

小普請組は八組または十組に編成されている。小普請組から人夫を出して小普請方や改役あてやくの宰領で工事が行われた。しかし、いわゆる小普請と言えは無役、現役に対する予備軍のことを意味した。無役になることを小普請入りと言つた。小普請組は職祿がつかず、家祿のみで暮さなければならぬので生活は苦しい。五郎太の家も屋敷の半分以上を町人に貸して家賃を取つていたし、母親の里江さとえは生花と行儀作法を近所の娘達に伝授して月謝を稼いでいる。定まつた勤務がなく自宅にいればかりの五郎太も月に三回、ないしは四回学問所に通う他は西両国広小路の水茶屋で代

書屋の内職をしていた。手紙の代筆業である。

江戸では存外に文字を書けない者が多かった。また、艶っぽい恋文などを、そつと目指す相手に渡すことは、依頼人が手間賃を弾んでくれるので内職としての実入りが多かった。

西両国広小路の水茶屋「ほおずき」は別名、文茶屋とも呼ばれている。手紙の依頼が多いせいだ。主の伝助は五郎太とは同い年で、乳きょうだいである。男のきょうだいがいらない五郎太は大人になった今でも伝助と親しいつき合いをしていた。伝助が仕事を世話してくれなければ小遣いもままならない。だから、素町人のくせに多少、自分に対して遠慮のない物言いをすることは我慢していた。

その日、五郎太はほおずきにやって来て、代書の用事を幾つかこなした。依頼人は五郎太に手紙を書いて貰うと、次にほおずきに奉公している彦六がこれを相手に届ける。彦六は以前に飛脚屋にいた男である。だから足だけは達者だった。春浅いこの季節、白いき、またの上にはほおずきの印半纏を羽織っているが夏場はほとんど裸同然であった。店先の葦簀の陰でいつもつまらなそうに煙管を吹かしている。年は三十五になっていたが、まだ独り者だった。

「先生、そろそろ行きますか？」

彦六は五郎太を急かした。五郎太は先刻から代書した手紙の文面をためつすがめつして一向に状袋の封をしようとしめない。そろそろ陽は西に傾き始めている。さつさとして来なければ日暮れになってしまうと彦六はやきもきしているのだ。

「彦、さつき来たご新造の顔を憶えているかの？」

手紙を頼んで来たのは三十二、三の武家ふうの女だった。

「へい。年増のいい女でしたねえ」

彦六は涎を垂らしそうな顔で応えた。

「去年の秋口にも一度ここにやって来たと思うが……」

「さあ、それはちよいと」

彦六は小首を傾げた。

「麴町の英家に届けただろうが」

「あ、へいへい。そうでした」

彦六はようやく合点のいった顔で肯いた。

「相手はどんなやつだい？ 英輝之進という男だよ」

「お屋敷の坊ちゃんだそうです。だが、あつしは手紙を門番に言付けたので、坊ちゃんの顔は見
ておりません」

「坊ちゃん……」

五郎太はその特徴のあるどんぐり眼を二、三度しばたいた。

「ごろちゃん、何を不思議そうにしてんのよ」

伝助が横から口を挟んだ。大きな茶釜の前に座っていて、客の求めに応じて煎茶やほうじ茶、
あられ湯などを淹れる。客に運ぶのは茜襪もかいがいしい茶酌女である。ほおずきでは三人の茶
酌女を雇っている。いずれも美人揃いである。伝助の女房のおしゅんも以前にほおずきに勤めて
いた茶酌女であった。名高い絵師の画材にされたこともあるほどの器量だった。今は米沢町の自
宅で三人の子供の世話を母親のおしゅんとともにしていた。伝助はそんな美人の女房がいるとは思

えない間抜け面をしている。しかし、商いの才覚はあったようで、ほおずきは結構、繁昌していった。

「さっきのご新造に書かされた文面なんだが、一筆啓上、いよいよ桜の季節になり申し候。花は桜、男は輝之進。小生はそうに思い候。それで仕舞いなんだ。不思議だと思わないか？」

「恋文にしちゃ愛想なしだねえ」

伝助も立ち上がって五郎太の傍に來ると手紙を覗き込んだ。

「小生って武家のご新造が遣うの？」

伝助は無邪気に訊く。

「遣わない。もっとも相手には手習いの師匠からと断っているが」

「何やら意味深だね」

伝助は薄い顎髭を撫でて言った。

「前の時はちょうど観月の頃で、今宵はさぞかし月が美しくござ候。貴殿も庭に出て月を眺めることを祈り候、だった」

「よく憶えてるね。さすがごろちゃんだ」

伝助は感心した声を上げた。

「短い文面だから何んとなく頭に残っていたんだ。あのご新造のそこはかとなない風情で、この手紙だろ？ 気になったの」

「せいじゃ、あつしが輝之進という相手の人相をよく見て来ますよ」

彦六はすでに草鞋履きの足をたたを踏むようにして応えた。

彦六が店を出て行くと五郎太は大きく伸びをした。茶屋もそろそろ店仕舞いの時刻になる。暮六つ（午後六時頃）になるとさっさと店を閉めてしまふ。その代わり、朝は早い。朝の仕入れをする商人がひと息つける場所としても利用されている。茶代は僅かだからつけにする客もいない。ほおずきが繁昌した所以である。おまけに手紙の取り次ぎもするようになって、西両国広小路でほおずきは有名な水茶屋となっていた。

「ねえ、ごろちゃん。まだ嫁さんを貰わないの？」

伝助はそんなことを訊いた。二十五になる五郎太には縁談がさっぱりなかった。小普請組ということが足を引っ張っているのだ。

「おれはまだ二十五だしな」

五郎太は言い訳するように言つて伝助が淹れてくれた茶を啜った。湯加減といい、茶の葉の香りといい、文句のつけようがない。家にいる時の五郎太はあまり茶を飲まない。ほおずきで飲むものに比べたら、まるで味も香りもない安茶に思えた。

「おれなんざ、三人の子持ちだよ」

そう言つた伝助の口調は自慢するふうでもなかった。諦めが混じっているように五郎太は感じた。

「お前は早生なんだよ」

「ごろちゃんはおくてかい？」

「そういうことだ」

「そう言えば、ごろちゃんの近くにいた俵たわらっていうお屋敷の娘、実家に戻つて来ているんじゃないな

いの？ この間、見掛けだよ」

伝助にそう言われて五郎太はぎょっと眼を剝いた。驚くと、その眼はますます大きく見える。小普請組の朋輩は陰で五郎太のことを「あの目玉」と言っていた。

「さあ、おれはしばらく俵の家には行っていないから様子がさっぱりわからない」

五郎太は、さり気ない口調で応えた。俵家も長く小普請組にいたが、長男の内記がめでたく勘定奉行所に御番入りとなっていた。さあ、父親の鼻息の荒いの荒くないのと、あるものではなかった。

内記の妹の紀乃は十九になるが、十六の時から本所の佐竹藩の屋敷に女中奉公に出ていた。年に一度ほど宿下がりをした折に里江を訪ねて来る。お転婆娘も女中奉公のせいで、しつとりと女らしい娘になっていた。

最近の紀乃を見ると五郎太は胸のときめきを覚える。以前は何んとも思っていなかったのだが。「赤ん坊の頃、あの娘、ごろちゃんの目玉に指を突っ込んで大変な目に遭わせたよね」

伝助は昔を思い出したように含み笑いをしながら言った。乳母に抱かれた紀乃を覗き込んだ拍子に紀乃は五郎太の眼に指を伸ばして引つ掻いたのだ。赤ん坊といえども衝撃は強かった。

五郎太は思わず道にしゃがみ込んでしまった。大事はなかったが、翌日の朝まで眼が痛かった。「赤ん坊にも何か不思議なものに見えたんだろうね、ごろちゃんの目玉」

伝助は五郎太の眼をしみじみ見つめながら言った。だが、突然思い出したように「あつ」と叫んで店の外に出て彦六の姿を捜した。彦六の姿はとくに見えない。出先で刻を喰えば、そのまますぐに帰ってしまう奴だった。

「あちゃあ、失敗したよ。届ける手紙があったのにさ」

伝助は舌打ちして店に戻ると葦簀の中に緋毛氈ひもうせんを掛け床几しょうぎを引っ張り込みながら言った。三人の茶酌女も後片づけを始めている。

「どこに届ける手紙だったんだ？」

「だから、その俵はこって家さ」

「何んだ」

五郎太は埒うちもないと言うように応えた。

「おれが届けてやるよ」

「それ、ちよつとやばいんじゃないの？」

「どうしてだ」

「手紙だよ。その紀乃あてって娘宛にさ。ごろちゃんが届けたら付け文ぶみじゃないかと勘繰られるぜ」

「まさか」

五郎太は呆あきれて鼻を鳴らした。

「俵の家は昔からよく知っている。そんな心配はしなくていい。おれに任せろ。その代わり、足代は貰もらうぜ」

「しっかりしてる」

伝助は笑いながら棚から手紙を取り出して五郎太に渡した。麗うるわしい字で俵紀乃殿と表書きがしてあった。

「これは、どこから頼まれたのかの？」